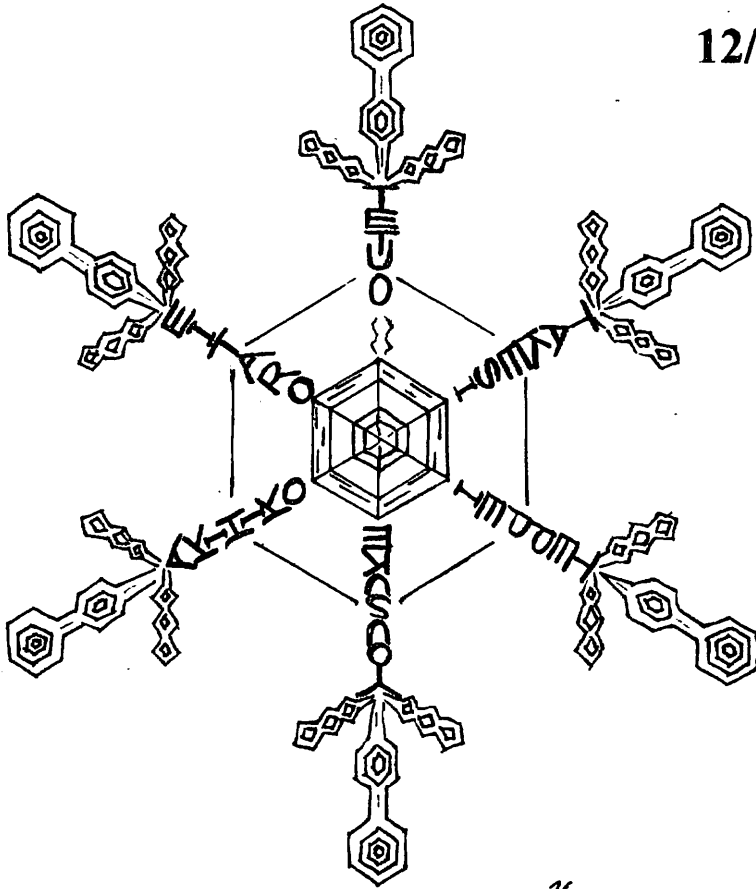


2004 年度

冬合宿報告書

(ヒノキオ尾根～笠ヶ岳～広サコ尾根)

12/26~1/3



六華山岳会

Yow.

この冬僕達は一つの結晶になった…。テヘッ☆

編集：片寄 哲生

表紙：片岡 陽介

— 目次 —

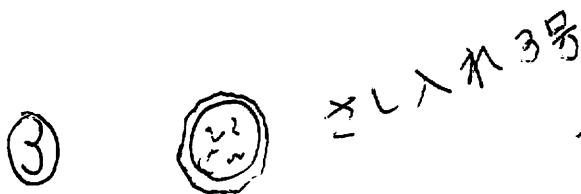
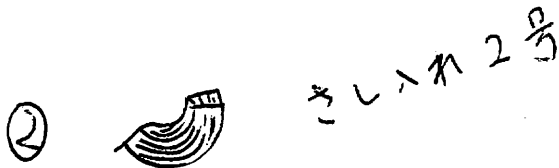
冬合宿概要 2

行動記録 3























個人の反省・感想 7

係の反省・感想 15

下の絵は何でしょう 答えは下



お酒はなし
クズンと

④  ⑤  ⑥  ⑦  ⑧  ⑨  ⑩  ⑪  ⑫  ⑬  ⑭  ⑮  ⑯  ⑰  ⑱  ⑲  ⑳  ㉑  ㉒  ㉓  ㉔  ㉕ 

<冬合宿概要>

山行山域： 笠ヶ岳南西尾根～笠ヶ岳～クリヤの頭～広サコ尾根～槍見

山行期間： 12月26日～1月3日

メンバー：片寄哲生(4) 高谷英太郎(3) 三森武志(3)

高橋昭彦(2) 片岡陽介(1) 佐山鉄平(1)

日程： 12/26 松本＝笠谷～ヒノキ尾 1590m T.S 27 下山サポートおよびテポ上げ

28 T.S～2200m T.S

29 T.S～笠ヶ岳山荘冬期小屋

30～31 沈殿

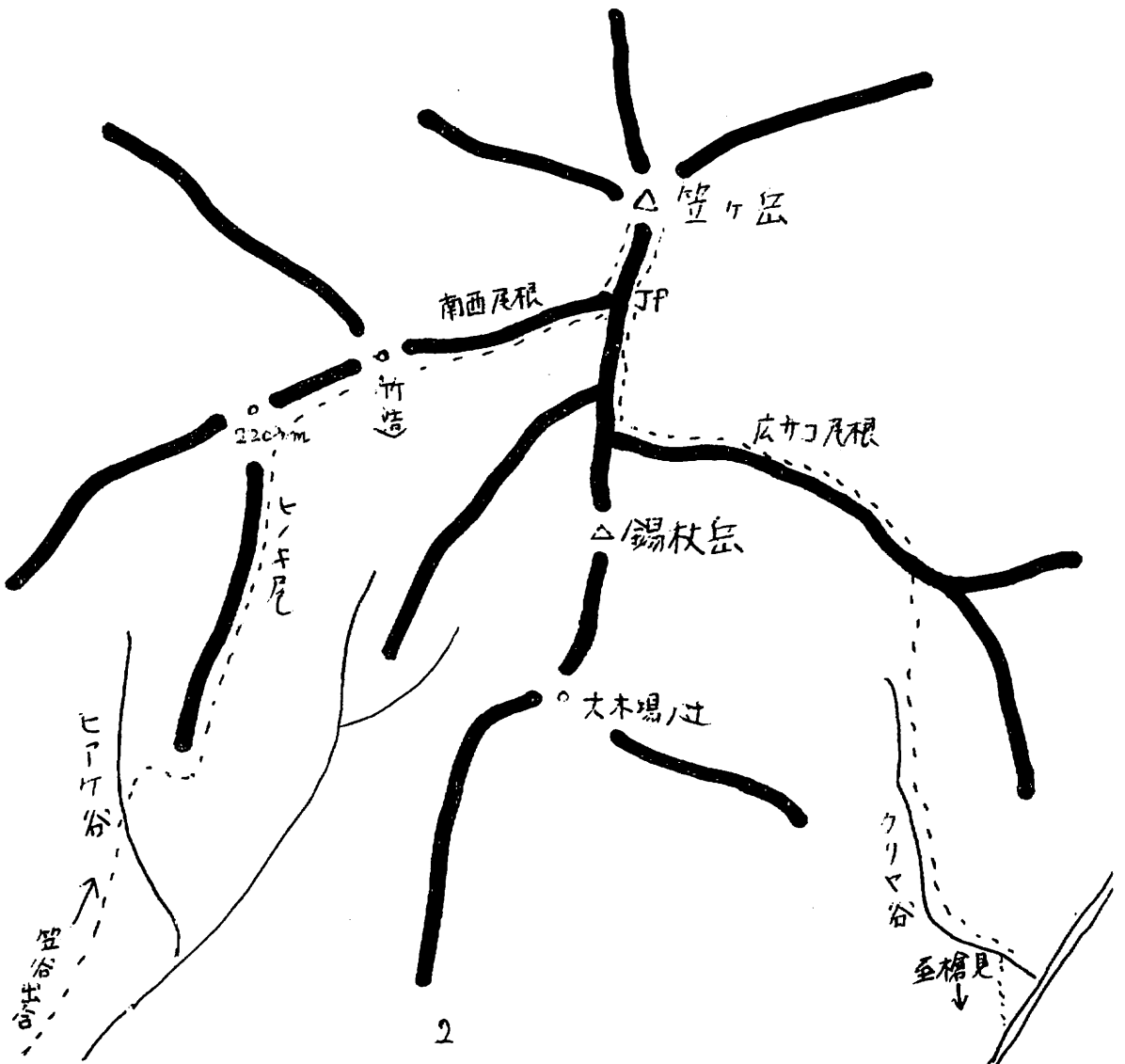
1/1 小屋～南西尾根 JP T.S

1/2 T.S～クリヤの頭～広サコ尾根～1850m T.S

1/3 T.S～槍見＝松本

全9日間

<概念図>



冬合宿行動記録

12/23～25 入山日を迎えてもなお雪が降らない。到来中の寒気を頼りに、“雪待ち”

12/26(日)

Box(4:00)～笠谷出合(8:00)～ヒノキ尾取付(10:20)～1590m 付近 T.S(14:00)

雪が積もったという話は全く聞けない。この際隣殺してやれとばかり意を決して松本を出発する。それでも笠谷出合でパッキングを始めたあたりから雪がちらつき出した。下山予定の新穂高に車を残置するために時間がかかり、予定より遅い出発となる。送迎役を引き受けてくれたかつての部員尾花一人に見送られ、下界を後にする。風は強めだが、雪はやみ始めていた。

ヒノキ尾の取付は林道を当てにしていると通り過ぎてしまう。取付に備えられた古いハシゴを見つけていざ入山。予想した通りの少雪で、アイゼンが妥当といったところ。最初の数十mがシャクナゲの藪漕ぎで、竹ポールをくり付けたガッシャが引っかかりまくる。

急登に加えて、ナイフリッジの樹林が続く。お助けがヶ所必要になる。意外に険しい入山だなどと思っていると、時折ワイヤーや木の板が現れる。昔は登山道が走っていたのであろうか？

尾根は次第に熊笹の生えた緩い台地状へと変わる。ここでアクシデント発生。先頭を歩いていた高谷が左内太股にアイゼン前爪をかなり深刺してしまった。もうワンピッチ進みたい所だったが幕営とする。今後を見据え、予備の食料で夕食を済ませる。

12/27(月)

起床(4:00)～高谷サポート隊発(6:35)～T.S 帰着(10:30)～デポ出発(11:00)～

2000m 付近デポ地(14:00)～T.S 帰着(15:50)

負傷した高谷をひとまず下山させるべく、念のためサポート隊二名をつけて送り出す。特に問題なく尾根取付まで下降してから登り返した。空荷なので早い。

テン場に戻った時間が早かったため食糧などをデポすることにする。三森・高橋に軽めの装備で先行させ、残り三名で後を追う形にする。熊笹の広い地形から急登に変わり、それがやがて疎林の相を呈し始めた辺りから今度は急に雪が深くなった。先行隊のラッセル跡が偲ばれる。昨日、一昨日で積もった雪だろうか？

2000m 付近で岩峰にぶつかる。ここで時間切れ。大した偵察もできず、Fix が懸念されるポイントも通過できず、実り少ないデポに終わってしまった。

帰りがけ、晴れ間が覗いて、明日の好天が期待される。笠ヶ岳は雲に包まれて見えないが、南側に目を移すとなだらかに続く広大な丘陵地が一望された。

今夜のエッセンも、予備の雑炊飯で我慢する。明日こそベミカン食うぞ！と、おかしな理由でモチベーションを高めつつ就寝。

12/28(火)

起床(5:00)～T.S 発(7:10)～1980m コル(9:30)～2203m(13:20)～2200m 付近 T.S(15:55)

夜の降雪がなかったおかげでトレースはばっちり残っている。荷物も少なく、気持ち早

めにテポ地点に到着。先行隊の三森・高橋は Fix 工作などの都合から若干軽めの荷物で進ませ、残り三名で歩荷。

ここから南西尾根合流までの岩峰帯の通過が今合宿一つ目の核心。

残置 Fix がチラホラする中お助けをセットすること数回で何とか通過。ルーファイのためかなり時間を食ってしまったが、入山前に聞かされていたほどの難は感じなかった。好天に恵まれたことも大きい。とは言え、上級生不足により Fix 隊が Fix に専念できないばかりに遅々としか進めない現状は歯がゆいものがある。

岩峰帯を抜けると、風通しの良い場所であるにも関わらず腰近いラッセルが続く。日が射して暖かく、景色もよいのに、この先のラッセル量を推測するとうんざりする。

2203mJP 先のコルで再びワカンに履き替え、竹造ピークを目指す。ところが樹林でズボる深いラッセルで思ったように進まない。夕方ギリギリまで歩いてでも竹造まで行くつもりだったが、無理と判断し幕営とする。

満天の星に加え下界の夜景が眩しい快適なテン場で、待ちに待った今合宿最初の実働飯を頬張った。

12/29(水)

起床(4:30)~T.S 発(6:45)~竹造コル(8:30)~笠ヶ岳(14:00)~笠ヶ岳山荘冬期小屋(14:40)

明日から天候が悪化することを考えると、できれば今日中に山頂をピストンしてクリヤの頭方面に下降を始めておきたい。こうした意味で正念場の一日。

昨夜満天の星をご馳走してくれた空は、出発の頃には小雪をチラつかせる曇り空だった。しかし風はほとんど無い。

ワカンを履き勇んで出発するも深いラッセルに足をとられる。山はそう易々と進ませてはくれない。しかも、2400m を過ぎた頃から、まだ弱々しいが今後確実に強まるであろう雰囲気の間風が吹き始めた。早く山頂をと気が急いで来る。

2600m でアイゼンに履き替えいよいよ山頂を目指す。時刻はすでにピストン選択のリミットとした 11 時を過ぎている。風も強まりだしていたことから冬期小屋へ向かわざるをえないのを感じつつアイゼンを軋ませ始める。一年に対しアイゼンワークの徹底と、凍傷に対する注意、また吹雪の行動のため励ましの言葉を連呼するのも余念を欠かせない。

風はいよいよ強く、もはや山荘まで休憩無しで進まざるを得ないかと思ったところで、クリヤ谷からの登山道との合流点(以下 J P と略称)と思しき場所に着く。見れば雪庇の張り出しもなく、東側で風をよけられそうだ。ここで一本立てて、最後の腹ごしらえをする。

いざ山頂へと出発。風は時折弱まるものの、視界は悪く山頂は一向に見えない。また、ここ数日でようやく雪が降り出したせいもあってか、稜線にも関わらず散在する吹き溜まりが意外に深い。ぶつさ文句を垂れながら急登を超えたところで『笠ヶ岳山頂』と書かれたプレートを見出した。吹雪で景色も見えず、寒くて山頂の余韻を味わう気も起こらない。さっさと小屋に向かおうとするが、せっかく全員で山頂を踏めたのに何もせず下りるのはどうも風情がない。吹雪の笠で春寂寥を大合唱・・・と記したいところだが、寒さの

ためそうもいかなかった。結局『フレイフレイ山岳会！』と一叫びしてから小屋へ向かう。

山荘を発見するのに多少手間取る。と言って、見つけた後は快適な小屋の中という訳にもいかなかった。まずは入り口の除雪。ドアが開いてからは、隙間から吹き込んだ雪のせいで、小屋の中は除雪が必要な状態であり、せっせと雪掻きとなる。しかしながらやはり小屋である。腰を曲げる必要もなく快適。すきま風による寒さを除けばの話だが・・・。

12/30(木) 吹雪のため沈殿。雪でドアが開かなくなるため入り口の除雪が欠かせない。

12/31(金) 相変わらず強い冬型。沈殿。今ごろ寒気が来やがった。遅い！！ マツケンサンバを聞きたいので紅白を流しつつシュラフにもぐる。松平健登場前に全員爆睡。

1/1(土)

起床(6:00)～小屋発(11:00)～クリヤ方面下降点(11:50)～幕営(13:15)

気圧の谷に加え、この冬一番の寒気ときはまさか行動できる天気になるはずもあるまいとタカをくくっていたのがいけなかった。九時の天気図をとってから用足しに出た数人から『晴れてるぞー！』の声。まさかと思って出てみると、なるほど風はあるものの確かに晴れている。どうも笠ヶ岳付近の気象というものは、“冬型だから”のようなセオリーに当てはめられない。擬似好天の疑いも拭いきれないが、2、3ピッチ分だけ視界が利いてくれさえすればクリヤ側に逃げられる。これを逃す手はない。慌てて支度を整えて出発した。

出発する頃には晴れ間は消えてしまっていたが、気象情報から想像するほどひどい吹雪でもなかった。この後の天候悪化に備え、JPまでの間に竹ポールを指して歩いた。

JPに着いた頃には辺りは一面ガスに覆われていた。そのため下降ルートの確認、また雪崩斜面なのか否か、さらにはこの先にある崩壊地を巻く地点のルーファイは果たして可能かなど不安要素が多い。ロープをつけた偵察隊2名を出す。ときおりガスにばやけて太陽が現れる度に『晴れろー！！』と絶叫してみたりする。偵察隊2名は次第にガスの中に消えてゆき、一年2名はツェルトをかぶらせて待機とする。

1時間ほど待った頃に“あらよ”の声。視界が悪すぎて下降は危険であり、地図上でどこまで行けたかすら確証が持てないと言う。仕方が無い。下降を諦め、テン場適地を探すことにする。JPのクリヤ側直下は、時期がもう少し遅ければ雪庇の張り出して怖いのもかもしれないが、今回は全く問題ない。その上雪も十分積もっているため整地するのも楽だ。ここをテン場とする。雪除けとトイレ付きの快適なテン場となった。

1/2(日)

起床(5:00)～T.S発(8:35)～クリヤの頭(12:30)～広サコ下降開始(14:30)～1850m付近T.S

エッセンが済んだ直後はまだガスが濃かった。確実に下降したいので待機とする。

ガスが晴れる傾向が見られ始めたので行動開始。まずは急な斜面の下り。新雪のため雪崩が気になるが、視界が利くためか昨日ほど危なく見えない。この後2480mのコルまでずっと間を開けての行動となる。特に崩壊地を巻く所は、視界不良時にはとても通る気になれない。

気の抜けない下降を終えて一本挟んだところから先を三森・高橋に先行してもらおう。1年

同伴で進んでいたのでは隊全体のスピードが上がらないためだ。幸いお助けすら必要なくクリヤの頭まで辿り着くことができた。

クリヤの頭から広サコ尾根取付きまでの下降も、雪だけの斜面でいかにも雪崩れそうだが実際に歩いてみるとそうでもない。

尾根取付きの平らな所で一本とするが、この時点で気の緩みが生じていたのだろう。赤テープを信じ込んで、地形図をよく確認しなかったばかりに、このあと真の下降路を見出すまでに1時間以上を無駄にした。ようやく確信を得て下降を開始したときには時計はすでに2時を回っていた。さらには、記述を鵜呑みにしていたせいで広サコ尾根の意外な悪さに手間取り、下降が遅々として進まない。

ズボりまくる針葉樹林のラッセルは延々と続き、一向に進んだ気がしない。クリヤ谷への下降ポイントを探るものの、谷側はこれすべて針葉樹であり、スピーディーに下れるはずもない。そんな中昨日一昨日あたりの入山者のものと思われるトレースが薄く残されている。シメたとばかりこれを辿ることにする。そのトレースも2000m付近の急勾配な針葉樹林を境に見分けがつかなくなるが、クリヤ谷側から巻くと再びトレースに合流した。

合流してすぐの小ピーク状の所(1950m)からクリヤ谷に向けて下降する。何とか平地まで、あわよくばクリヤ谷の登山道まで、そうすればヘッドライトで行動しても槍見に辿り付けるということでペースを上げるが、さすがに時間が足りなかった。真っ暗になる前に見つけた狭い場所を無理やり埋め立てして幕営した。この日は皆ともにビショ濡れ。

1/3(月)

起床(5:00)~T.S発(7:10)~槍見(9:30)~松本ボックス(12:00)

間違いなく合宿最終日であることを感じつつの出発。天気は移動高すっぱりの快晴

意外に早く平地に出たことから、昨日の時間切れがなおさら悔しい。しばらく行くと、昨日のトレースと同一のものに違くないトレースが現れたので、拝借させてもらう。おかげでたった1ピッチで錫杖沢の出合に着くことができた。全容を現した錫杖岳の岩壁に見とれつつ最後の一本をとる。ここから先はすでに歩きなれた道。久々に自分達以外の人間とすれ違ったりするのが新鮮だ。

次第に新穂高の温泉街も見え始め、槍見に到着。駐車場に着くと、途中下山した英太郎が車の除雪を済ませて待っていてくれた。下山させてから1週間ぶりの再会。

合宿を成功させて栃尾で歌おうと覚えてきた『雲に囁く』は、来年の合宿成功の暁にこそ歌ってもらうことにし、例年通り春寂寥1曲の大合唱。相変わらず節の外れた歌い声ばかりだが、むしろこれがいいのかもしれない。こうして冬合宿は幕を閉じた。

個

目出帽からつら



まっ毛に樹氷

人の反省感想



残置された
竹ホール

冬合宿の反省感想

また

自分にとって冬合宿とはどういうものなのか

冬合宿。それは山岳会の活動の中で、一年間の総まとめみたいなものだと思う。それなのに完全な入魂ができなかった。冬合宿に行くんだ、という意志はあったのだが、トレーニングにしても時間を作ることができずあまりやらなかったし、事前学習もやらなかった。豪がやめる理由に冬合宿へのモチベーションが湧かないといていたが自分も大して変わらないんじゃないかと思えた。本当に会を続けるべきなのかとも思う。今の中途半端な気持ちでは会全体を悪くしそうな気がする。なぜ中途半端になるかという、僕が大学に来た理由として山だけのために来たのではないからかもしれない。他にもやりたいことがあってそっちの方にも気をとられている。今の上級生のように山に大半のウェイトを掛けることができないのだ。片寄せさんの話を聞くと大学四年でできることは一つぐらいしかないという。つまり勉強と山を両立する力がなく、会を続けたいならやりたいことを山にしぼるしかない、と。上級生を見ていると山以外のことに手を出している人は見たところいない。僕が見えていないだけかもしれないが。授業に関しては単位が取ればいい、みたいな感じであるような気がする。今の僕も授業に出てもそんな感じになってる。かなり小さいことを言っている気がするが、要領の悪い僕には今の状況が辛い。この先二年になって更に授業が専門化してやりたいものになってくるのに、単位が取ればそれでいいといったことが果たしてできるであろうか？更には会の中でも二年といえば先頭切って何かをする学年でもある。おそらく手が足りなくなるだろう。こんな事を言うと高谷さんに何弱気になってんだ？気合いだ、気合いで両立させればいいじゃんか！などと一蹴されそうだが……。OBの方にはたくさん院まで行ってる人がいる。つまり山と学問を両立させた方々だ。しかも今の会よりも厳しい状況で。そういう人たちがどうやっていたのか知りたい。やっぱり気の持ちようが違うんだろうか？気合いが違うんだろうか？確かに好きなことには信じられない力が出される……。やっぱりやるしかないか……。自分のスタイルを見つける。いきなりの結論ですが会のみannaには迷惑がかかるかもしれないけどもう少し続けさせて貰います。

さて冬合宿中の反省だが少々物が壊れすぎた。ヘッドランプ、スパッツ、手袋……。ヘッドランプに関しては行動中首に付けっぱなしだったのが原因なのでもう少し大切にしようと思う。山用具は自分の命だからね。スパッツはありがたくも貰い物でファスナー

が凍りやすくなっていて脱ぐとき力を入れすぎてツマミ部分が壊れた。これも優しくしてあげなかったのが原因である。僕の場合、自分に余裕が無くなるとどうも力づくでやろうとする傾向がある。動きに美が無くなる。下品だ。それをまず直したい。手袋に関してはコンビニで買った薄手がすぐに指先が切れてくるという目にあった。初めての冬山で、道具を試すということもあったのでこればかりは「コンビニ手袋はダメなんだ」と学ぶ事ができた。他にも改善点はあるがお金がかかるので少しずつ変えていこうと思う。それにしても冬山装備は金がかかる！これも貰える人へのアプローチが遅かった自分が悪いわけで十分な反省点である。また他にはいつもながら行動が遅いということだ。もっと自分なりに工夫して早くできるようにしないとダメである。めっ！後は危険箇所通過後の気の緩みが出ることだ。緊張後ホッとしてしまうのである。事故の多いタイミングだ。一ついい案がある。常に危険箇所並みに緊張することはできないから、常に平静を保つのである。緊張するわけでも緩むわけでもない。でもこれには熟練が必要だ。長い時間が掛かりそう。一番の反省はやはり体力だろう。トレーニング不足のための体力のなさ。この体力じゃラッセルなんかできやしない。順番が回ってくる前に疲れてるんだから。そのため他の人には迷惑を掛けてしまった。情け無いの一言に尽きる。そしてごめんなさい。

感想としては今回見た冬山は想像したようなものだった。時には容赦ない厳しさを見せながらも、時には限りなく美しく優しい。厳しさが出たのは笠の避難小屋に到着する前と避難小屋で沈殿を喰らっている時であろう。外はものすごい風と共に吹き付ける雪の破片。そして冷たく乾いた白い空気。小屋の中だけがダイヤモンドダストがゆらゆらと舞う穏やかに澄んだ空間である。そんなギャップの狭間を人間がうろうろしてるんだから面白い。みんなで輪になり足を温めあいながら年明けにトランプなんてしてるのもまた滑稽だ。小屋の中には簡易〇〇〇までできてしまったのは嬉しい限りである\(^)/ また美しさを得たのは下山パワー漲っていた頃に見たもので、朝陽に染まった錫杖である。白いはずの雪は朱金色に変わり黒い岩肌はそのまま漆黒の暗さを保っている。青空の前~~に~~立ち並んだ屏風のような山頂もまた良かった。いつかこういうものを写真で表現してみたい。そのためといったら悲しいがもっと冬山に限らずいろんな事を経験していかないとなあと思った。

あっという間に一年が経ち僕は二年になります。ある程度自由の利く二年、さて何をしようか！楽し～みだ。あっ、今年の新入生はどんな奴が入ってくるのかな？体力ムッチョな奴だったら大変だ！バシリ負けらんねえー！

一年 片岡陽介

反省・感想

恐怖は無かった。

ガスが晴れて下界が一望でき時に全身に鳥肌が立ったのがわかった。

ワカンが緩む…。調整してきたつもりが、本当に『つもり』だった。

合宿後、すぐに改良した。いろいろと試すつもりでいる。

ラッセルは無残なものだった。全く戦力になっていない。コツを攫むまでにいたらなかった。

しかし、嫌ではなかった。ラッセルを楽しめるようになろうと思う。

自分の目の前で上級生が怪我をした。

取り乱している自分に気がつく。現場の自分がそれに気がついたのだから相当取り乱してしたのだろう…。

失礼だがいい経験になった。

稜線で吹雪かれて必死に手足を動かした。久しぶりに生きた心地がした。『凍傷になんてなりたくない』懸命だった。そのときは、あまり周りを見ていなかった。

余裕が無いの一言に尽きる…。

経験・知識・感覚、強固なものを削っていこうと思っている。

日程は縮まり、且つ、敗退に終わった合宿だったが自分の能力の無さが明白となった。

冬山とは、目標を持ち、強い意志を持って行動して初めて立つことのできる舞台だと感じた。

人は変わることができる。

自分の意思で、思い通りに。

文責：佐山 鉄平 一年

冬合宿・反省文

高橋昭彦

先日ラジオを聞いていたところ何の番組だったかは忘れたが、言ってはいけない愚痴について話していた。その中で意外だったのが「暑い」「寒い」という言葉。何でもそれは天気に対する愚痴なのだそうだ。それを考えると今回の「雪が無く入山を遅らせる」というのも僕らの無力さを棚に上げて天気に対して愚痴っていたのかもしれない。今思うとそう思った時点で僕の冬合宿は終わっていた。一度牙をむけば人の力ではどうにもならない冬山をなめてかかっていたのだから。

入山後も自分にとって有り得ない事態が起こった（よくよく考えれば必然だったのかも知れないが）。山行中で完全に心が折れてしまった。今までに入山前気合が不十分だったことは何度かあったが、そんなことは始めてであった。ただ単に体力や技術が足りないだけならまだ救いがあるが（上級生にもなってもそんなことを言っている時点で終わってるけど）これほど自分が惨めであってはいまだかつて無かった。合宿の後半は自分が何故ここにいるのか、何をやっているのかを自分に問い掛ける毎日であった。

原因はどう考えても心が折れるという以上、自分の心の弱さに行き着く。心が山へと向かっていなかったが故にこんな恥ずかしい事態を招いたのだ。夏休み（ちょっとオーバー）の日本横断が終わった段階で心は次の山へと向かっていたはずだった。しかし結局のところ慢心を生み出したに過ぎなかった。今思っているのは夏の30日は冬の1日にも満たないということだ。

そんなわけで本来なら自分が前に出てガンガンラッセルしなければならないのに、皆にやらせてしまうという結果になってしまい大変申し訳なく思っている。片寄さん、最後の合宿だというのにラッセルをやらせてしまい、今年は好き放題やらせていただいたにもかかわらず働けない二年で申し訳ありませんでした。また、偵察に行っても三森さんに頼りきりになってしまいました。一年にもよい見本になれずまないと思っている。

いま、自分が一年の時の新人合宿報告書を読んでいる。自分で言うのも何だが今の自分では直視できないほど眩しい文章だ。あの時と同じ気持ちに戻ることが、今の状態から抜け出す唯一の方法なのだろう。「情熱さえあれば、努力さえすれば、山登りほど自分の夢を叶えてくれるスポーツは他に無い」、そして光小屋のノートで出会った書き込み『「情熱」が合言葉の信州大学山岳会』。この言葉を深く噛み締めて今後も山に向かっていきたい。

気持ちが切れ自問しながら歩く中で、「もう止めたら」という問いも多々あった。しかしそれが来る度ここで終わってたまるかと振り払ってきた。なぜなら再び白く光り輝く、栄光の頂に立ちたいから。そして吹雪の後に現れる、暖かな陽光に包まれたいから。

2005.1.9 高橋昭彦

冬合宿の反省・感想

三森 武志

今回の合宿は、自分の成功に対する執念が足りなかったように思う。高谷さんの途中下山でその後の上級生の動き方が大きく変わった。というのは、自分はその場ごとに動くことはできて、今後の流れがどう変化していくのが読めていなかった。思えば、一年一人に対して上級生2人とはいえ、たったの4人しかいない。1人欠ければ動きづらくなるのは入山前からわかっていたことである。わかっていたなら、もっと徹底した偵察や、装備の変更を組めたと思う。全体を把握することができなかったというのが、今合宿の自分の反省点である。どうしたらよくなるのか？ それは考えながら登りしかないと思う。山登りは体感するものであると思うが、それだけではいつまでたってもよまくなる。今後、山を続けていく上でも、何が重要で、何を切り捨てるべきなのか常に考えるようにしたい。

冬合宿について 高谷 英太郎

今回の冬合宿は怪我で下山という情けない形で終わってしまった。隊に迷惑をかけ大変申し訳なく思っている。今回の合宿は入山前から気持ちの面で不備があったと思う。合宿に臨む熱い思いがなかった。原因を考えてみると、個人山行で自分で計画を立て自分なりの山登りをするおもしろさを知った反面、今合宿は計画段階において受身にまわってしまい、合宿に向ける情熱が生まれなかったことが原因であったと思う。そこはケジメをつけ気持ちを切り替えなくてはならなかったのだろうが、その当然のことが今回自分ではできなかった。情けない限りである。自分が言うのもおこがましいが、去るものとして一つ言わせてもらう。冬合宿の計画は例年リーダーが立てたものを中心として決定することがほとんどだが、リーダー部員も計画段階から積極的に参加しみんなで思慮を重ねる中で計画を決定していった方がいいということだ。その方が合宿に対する意気込みも違ってくるし、隊の一体感も生まれてくると思う。とにもかくにも途中下山した自分が言えることは限られる。ただ言えることは来年こそは合宿を成功させて欲しいこれだけである。四年間一度も冬合宿を成功させられないまま会を去るのは残念だが、そのフラストレーションをこれからの山人生にぶつけていけたらと今は思っている。



過去 3 年間敗退を繰り返した冬合宿。これまでの経験すべてををかけて臨んだはずの合宿に 4 度目の正直はなかった。

敗退が失敗だとは必ずしも思わない。敗退したとしても充実感に満ちた山行はいくつもあるからだ。敗退した山から学ぶことの方が多いのかもしれない。今回はどうか？

敗退の最大の理由は、リーダーとしての自分の合宿構成力不足。入山日を遅らせ、入山前後の部員一人一人の気持ちをまとめ上げられず、非効率・不適切な指示を出した。

入山日を遅らせる。雪がないためとは言え、たったこれだけのためにどんなにか士気を落としたことだろう。せめて入山予定日にヒノキ尾から入山とすべきだった。

入山前後の士気の把握。上級生ですら気を抜かれた状態でいたということに気づきすらしなかった。それを見逃していたのは自分の到らない所である。しかしながら、気の抜けた上級生なんてものは実力が 1 年に勝るだけで、合宿に着いてきているだけという意味で 1 年と何ら変わりはない。詰まるところ登山において最優先されるべきものは“気持ち”であるのは間違いない。

非効率・不適切な指示。“あそこでああしておけば”と考え出したら切りがない。自分の判断一つに隊の命が懸かっているのかと思うと、つつい守りに入った判断しか下せなくなっていたのかもしれない。隊の中で最も血気盛んであるべきは 2 年だとよく言われるが、部員の構成次第ではリーダー自らが猪突猛進を演じる必要があるようだ。

雪がなく、当初は 4・5 日で瞬殺するつもりでいたのが 9 日かかった。相変わらず稜線に出てから気圧の谷と寒気のお出迎えに見舞われた。このツイて無さはなぜだ？ 奇しくも昨年の一文字は『災』。今年度の SAC は新人合宿が雨、夏合宿が台風、プレ冬は雪なし、冬合宿も雪なし、入山してから大冬型！ 個人的にも戸台で落石食らったりなんざりで、露払いはとっくに済んでいるものと思い込んでいたのに……。自然に鼠兎はないなあ。

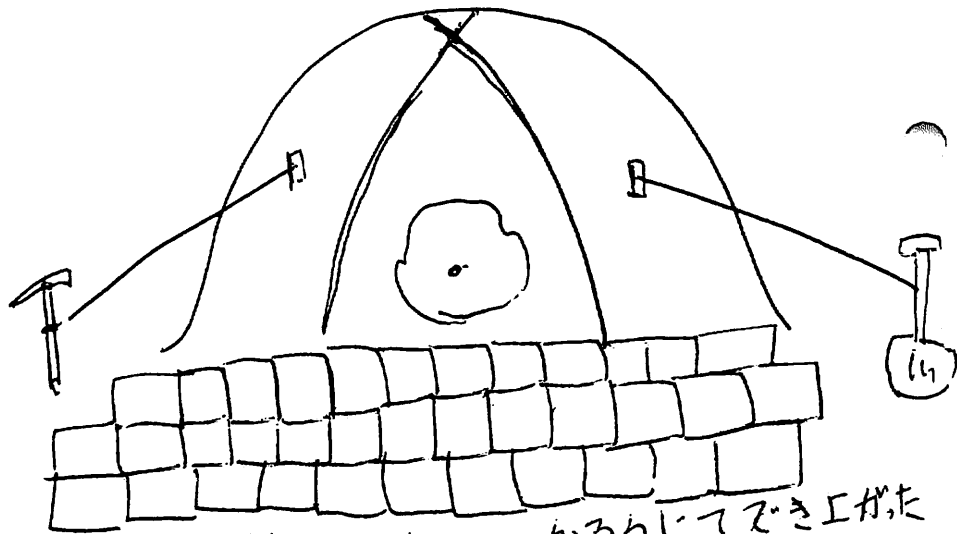
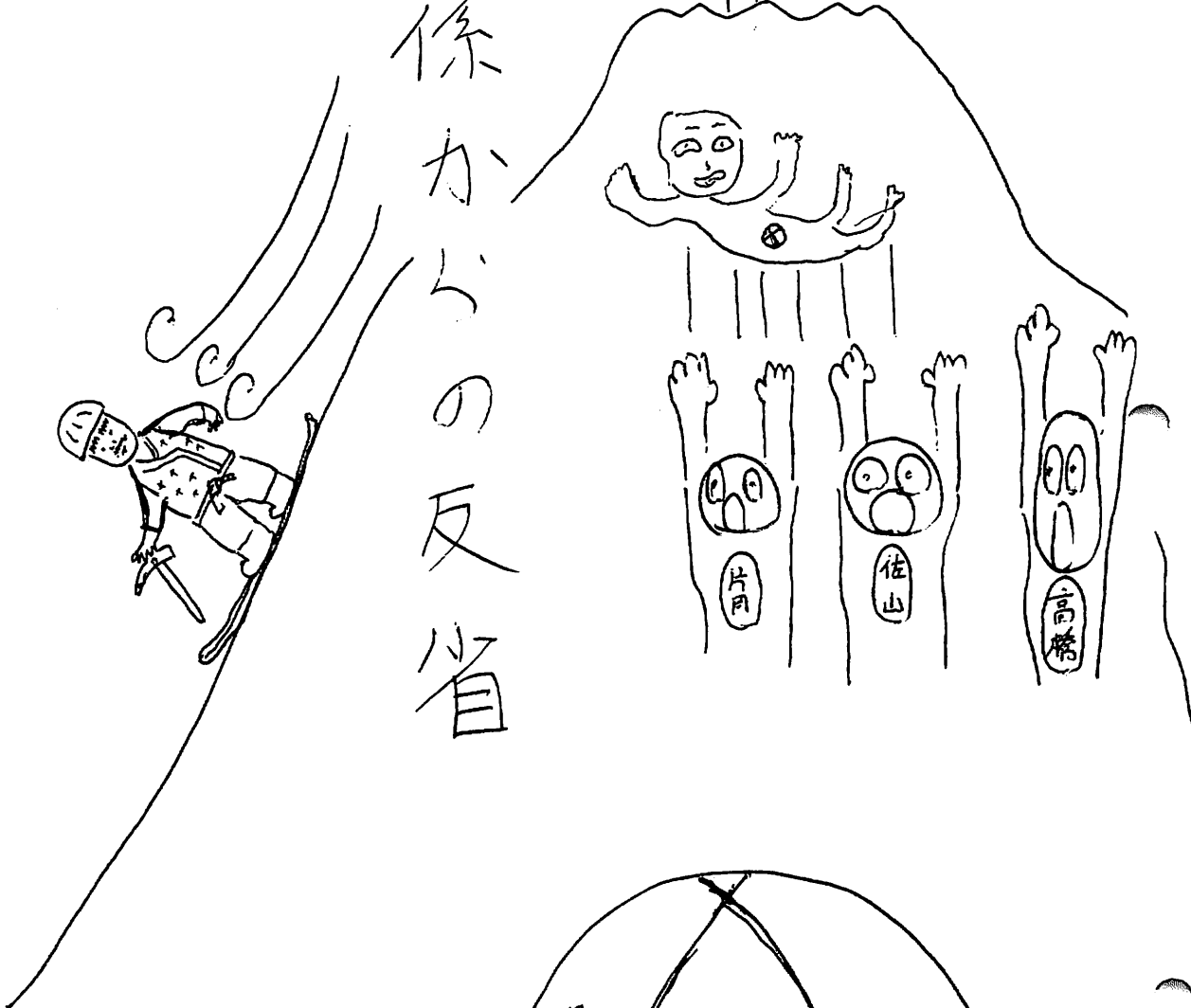
今更ながら、昨年度冬合宿を終えたばかりの佐藤さんが吐いた言葉『来年の冬合宿に行こうかなあ』の気持ちがよく分かる。現役 4 年間中の冬合宿で成功を見たいという思うのはどうしてだろう？ 来年の冬に日本にいるかどうかかわからないが、現役には来年こそ成功を果たしてもらいたいと思う。成功した上での“雲に嘯く”は最高だろう！！

上級生へ：先発隊などお疲れ様。人数ギリギリのところよく動いてくれました。来年は仕切り役として会をまとめてくれ

1 年へ：まだまだ足りない。上にも書いたが、山の実力以前に気持ち。今度の春にはもう上級生なのだ。厳しいようだが、上級生として使えない奴は、歩けない 1 年より質が悪い。精進すべし。

賢岳山頂

係からの反省



整地のあげく ころりしてでき上がった
テニ場。 8日晩

エッセンの反省

三森

- ・入山中に途中下山者が出たということ、エッセンを整理したりして、予備分の食糧を捻出したりした。ラーメンや米なんかの一人一食と、いるものはやりやすかったが、もちやマカホクなどの全員分が一まとめになっているものはできなかった。多人数で行く場合はこういう点を考慮してもいいと思う。
- ・どんなおいしくなす食材を持っていても、冷えているとまずい。逆に言えば温かければ、多少はたいて気にならない。全員が全員、うまいがスの使い方をすれば、温かくしてもけしてがスの消費量は増えない。
- ・今回、特筆して珍しいものは持っていかなかった。しかし冬山で重要なのはバリエーションであると思う。
- ・「あ、今日はこれか」と思わせる意外な組み合わせとか。
- ・まだまだ探せば、軽くて高カロリーなものとかたくさん見つかると思うので、今後エッセン系になったものはさらに精進してくれ!!

会計・渉外

収入 17000×6=102000円
支出 65238円
装備 12940円
食費 38298円
交通 14000円
残金 36762円

*渉外は、車の手配を余裕を持ってやること。部外者に頼まなくてはならないことや公共交通を使うこともありえるので。

*車を出してくれた人ありがとう。特に部外者の尾鼻。本当に助かりました感謝します。

冬合宿装備 反省

高橋昭彦

- ・ 今回の白ガスの量は実働 150ml/人、予備 80ml/人だったが、予備分でも全員分のテルモスを作ることを考慮に入れていなかった。また、空炊きの消費量を計算していくべきだった。
- ・ 白ガスに水が混入すると途端に調子が悪くなる。ガス入れは天候を考慮してどこで行うかを判断するように。
- ・ 小屋で炊事をする時はツェルトをかぶると白ガス節約になる。
- ・ ボールのゴムの劣化が早かった。気温が原因か？
- ・ ジャンポテントは樹林帯などで緊急に張るには不便、笠からの下りのことを考慮するともっと竹ポールは必要だった。
- ・ 持っていく道具は少しでも整備しときませう（張り綱^{つな}、鍋の底、MSR等）

おまけ 本はしっかり防水しないと凍ってくっつきいらぬ誤解を受けるから注意。

《医療からの反省》

- ・今回はアイゼンでの負傷において滅菌シート、ガーゼ、包帯を使用した。冬山では風邪など内科系の心配ばかりされがちだが、アイゼン・ピッケルでの外傷対策も不可欠。
※ アイゼンについて一つ提案。新人に新しいアイゼンを購入させる場合は先の丸めてあるものを選んだ方が、実力相応で下手な怪我をしにくいかもしれない。
- ・風邪ひき用にビタミン C 系の粉末ドリンクを携帯したが、今回は MSR 空炊きのおかげもあって小屋での沈殿中も風邪ひきが現れなかったので出番なし。濡れた服さえ乾かすことができるなら、風邪を予防することもできるということかもしれない。

《気象からの反省》 担当の高谷に代わり・・・

- ・ラジオが湿気に曝されるのには細心の注意を払った。気温差による結露は免れないだろうが、 α 米から出た乾燥剤などを同封して大事にしてやること
- ・大型のラジオは重たいけれども電波の入りは抜群。長期の縦走ならば持って行く価値は十分ある。
- ・この大型ラジオでたんば放送が受信できたことも大きい。高層気象が放送されないのは残念だが、朝 5 時 25 分から放送されるこの地上天気図の情報も十分参考になる。
- ・朝のテレビ NHK 総合では頻繁に気象情報をやっている。たんば放送で表した天気図と合わせて役立つべし



編集後記

— 一文一画形式 —

① 片寄

小さな幸せ 2つ。

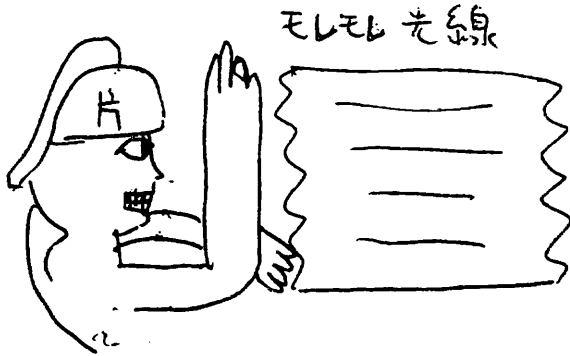
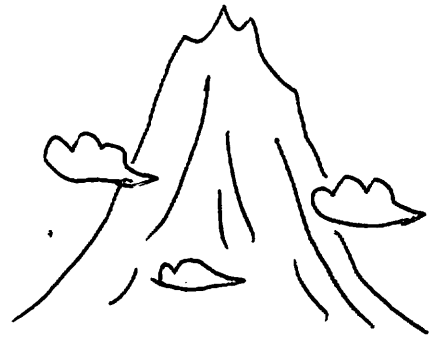
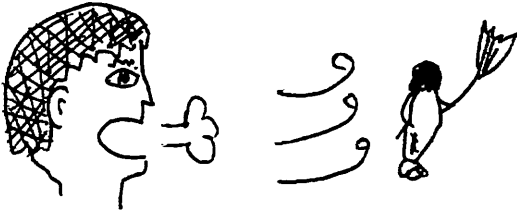


光り輝く白米 と



額に汗流して
いただきますの
おいしさ

② ほっと一息



モレモレ 光線

SACA L/R



笠ヶ岳山荘 冬期小屋間取り図

サーンパとぼ サンパ!! マツケン サンパ---!!!



SAC